慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	オーストリア刑法雑誌論文目録
Sub Title	Personen-und Sachregister der österreichischen Zeitschrift für das Strafrecht (1910-1920)
Author	宮沢, 浩一(Miyazawa, Koichi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1968
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.41, No.7 (1968. 7) ,p.45- 62
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19680715-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

オーストリア刑法雑誌論文目録

宮沢浩一

解説

一　オーストリア刑法雑誌は、一九一〇年に生まれ、第一次大戦の敗戦とそれに続く混乱のうちに、一九二〇年、第八巻をもつて、その短かい歴史をとじた。第一巻から第六巻までは、各年一巻ずつ発刊されていたが、戦況が不利になるに伴い、第七巻は一九一六年から一八年の前半、第八巻は一九一八年後半から一九二〇年というように、合併号の形で出た。

今日、この余りにも短かい期間しか存続せず、刑法雑誌として、終りをまつとうしたとは思えないこの雑誌をとりあげて紹介する意味はどこにあるのであろうか。

二　オーストリア刑法雑誌の創刊号に、編集責任者、ウィーン大学のアレクサンダー・ロエフラーの発刊の辞がある。それによると、同誌は、刑法の理論においても、立法においても、従来、ドイツの刑法学に負うところが極めて大きかつたオーストリアが、これまでとは逆に、刑法学の発展に対するオーストリアの寄与をはたすために創刊されたのであつて、同誌の存在により、外国の刑事立法者や刑法理論家の関心をオーストリアの研究・実務へいざなおうという意図の下に発足した。それとともに、外国の刑法理論の展開、外国、内国の立法の状況を充分に反映させようとするものである。このため、オーストリアの事項については、完全を期し、ドイツその他の外国については、既存の刑法雑誌と競争をしたい、との抱負を述べている。

そして、この雑誌が時代の鏡として、正確に現状を反映するために、一方の側に偏することを避け、いかなる立場をとるにせよ、真摯な研究者の論説をよろこんで掲げたいといつている。

さらに、判例の動向には、特に注意すること、及び立法が実務にどう浸透していつたかにも注意を払う。その扱う研究対象は、刑法・刑事訴訟法及びその他の補助科学であるということなどにも言及

している。

この第一巻の共同編集者には、グライスパッハ（当時プラーハ大学、後に、ウィーン大学を経てベルリン大学の諸教授を歴任）、グロース（グラーツ大学教授）、カール（ベルリン大学教授）、ランマッシュ（ウィーン大学教授）、レンツ（グラーツ大学教授）、リリエンタール（ハイデルベルク大学教授）、v・リスト（ベルリン大学教授）、シュトース（ウィーン大学教授）等、当時の独・墺の刑法学界を代表する人人の名前が見えている。

オーストリア刑法雑誌は、この創刊の辞にうたわれたような使命をはたしたであろうか。

三　同誌の誕生の年は、ドイツ、スイスとともに、同国でも刑法改正の大事業が発足した重要な時期であった。ドイツにおけると同様、オーストリア、スイスは、ともに、前世紀からの刑法改正の動きが次第に具体化の歩みを速め、一九〇八年にはスイスで、一九〇九年には、ドイツとオーストリアで、それぞれ刑法改正の諸（予備）草案が発表され、それをめぐる活発な議論が展開されていた。

発刊の第一巻第一号は、近代刑事立法史の巨人、v・リストとC・シュトースが、ともに保安・改善処分を論評する論文を寄稿して、その発足を祝つた。

当時、オーストリア・ハンガリーという、ハプスブルク家の権勢をもつて一大帝国を形成していたオーストリアの刑法学の状況は、この雑誌にもよく現われていて、ハンガリー系と思われる学者や実務家の寄稿がかなり多い。

オーストリアの刑法学を世界に紹介するという役割は、たしかに、充分にはたしている。

編集責任者のロェフラーが、縦横の活躍を示したことは当然として、エックスナーやカデチカ等が若い頃の筆のさえを見せているし、リットラー、レンツ、グロース、特に、グライスパッハやシュトースの健筆がはなばなしかつた。

外国の論客も、スイスのデラキー、v・オーバーベック、ドイツでは、v・リスト、ビルクマイヤー、アシアフェンブルク、リープマン、ミッテルマイヤー、ハイムベルガー等が寄稿しているが、我が国では、ジェームス・ゴールトシュミットの「緊急避難論」が特に有名である。

内国・外国の立法については、非常に詳細な報告が出て居り、第一次大戦前後の独語圏の刑事立法の動きを知るのに、貴重な資料を提供してくれる。但し、一九一四年以降は、立法の大部分が、現在では、参考となつては困る「戦時刑法」「軍刑法」の立案に割かれている。

同誌の資料的価値は、刑事判例を附録としてかなり組織的に集めたところにもある。即ち、一九〇九年から一九一五年までに宣告された最高裁と破毀院の判例七五五件を分載し、重要なものには評釈をつけ、しかも、各分載分ごとに事項索引及び条文索引までつけてある。これには、実務家の協力がなされている。

以上、極めて簡単であつたが、オーストリア刑法雑誌が、まこと

に短命であつたにも拘らず、充実した内容の雑誌であつたこと、そして、戦争という不幸な出来事とヨーロッパにおけるオーストリアの国際的地位の後退、それに伴う国力の低下等が、このすぐれた国際的刑法雑誌の運命を絶つたことの説明をしたことにする。

オーストリアの刑法学は、たしかに、余り研究されていない。一八〇三年にまで遡ることの出来る、一八五二年公布の刑法典をもち、刑法の体系書としても、例えば、古くは、グラーザー、ヘルプスト、ヒュイエ、ヤンカ、イエヌル、近くは、ランマツシュ、シュトース、或いは、ホロウ、マラニウク、カニアク、リットラー、ノヴァコウスキー、ロエーダーや最近のプラッツグンマーのモノグラフィー等があるのに、ともすれば、ドイツ刑法学の影にかくれてしまつている。

さきに、一九六二年、一九六四年の両草案が斉藤金作教授の主宰される早稲田大学の研究陣によつて邦訳され（刑事基本法令改正資料第五号、第九号）、最近、特に、都立大学の内藤教授の一連の御研究（立法問題としての緊急避難・警察研究三八巻九・一〇号（未完）、立法問題としての正当防衛・判例時報四八八、四九三、四九四、四九七、五〇〇、五〇三号、立法問題としての不真正不作為犯・判例タイムズ二〇九、二一〇、二一四、二一五号（未完）において、第一次大戦後のオーストリアの刑法改正の動向に関してかなり明らかにされた。若し、今後、補足するとすれば、私の紹介する論文や、或いは立法資料をたんねんに読んで、内藤教授の拓かれた道に沿いつつそれ以前の状況に検討のメスを加えてゆくことであろう。

四　オーストリア刑法学のその後の展開を知るには、どうすればよいか。刑法の専門誌ではないが、戦前からのものに、Juristische Blätter と戦後の一般雑誌として、Österreichische Juristenzeitung の二誌があり、Österreichische Zeitschrift für das öffentliche Recht Zeitschrift für Rechtsvergleichung にも、若干、刑事法の論稿が見える。

私共の研究室の資料の充実さからいつて、さし当り、一般雑誌二誌から、刑事法関係の論文目録を作成することは可能であり、カードの段階では、すでに整理は終つた。

五　最後に、同誌の資料的価値からいつて、いかなる部分が、今日、最も重要であるか。

①オーストリア刑法改正に関する論稿がその第一、②次に、オーストリアの少年法改正に関するグライスパッハの論文と、ウィーン法学協会における討論、③そして、第三に、一連の責任に関する議論、に注目すべきものがあると私は考える。

本資料を利用される方々に便利であることを考え、まず、執筆者名別に論文を整理し、分る限り、筆者について紹介をする。

次に、事項ごとに、一括し、その事項にまとめた中では、氏名のABC順で整理し、同一人については、論文発表年度に従つて整理した。

オーストリア刑法学研究のための、ごくわずかの距離の間の粗末な里程標であるにすぎないが、利用していただければ幸である。

資料篇

一　人名別目録

Aschaffenburg, Gustav.

当時、ケルン大学教授として、犯罪学の研究の中心的存在であつたことは、説明するまでもないであろう。

Experimentelle Psychologie und Strafrechtspflege. ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 71 ff.

この論文には、次のような編集者ロェフラーのあとがきがある。

Löffler, A.; Nachwort zu diesem Aufsatz, ebenda, S. 87 ff.

Auer, George.

ブタペスト高等裁判所の上席判事である。

Ungarisches Kriegsstrafrecht. ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 17 ff.

Bámbéry, Rustem.

ブタペストの検察官から、私講師になつた。その後の消息は不明である。

Die Fachbildung der Gefängnisbeamten, ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 505 ff.

Die Schwurgerichtsreform in Ungarn. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 357 ff.（私講師）

v. Birkmeyer, Karl.

当時、ミュンヘン大学教授であつたビルクマイヤーが、v・リストの論敵であり、古典派対近代派の論争の中心人物であつたことは、詳しく説明する必要もないであろう。

Gesetz und richterliches Ermessen in den Vorentwürfen zu einem österreichischen und einem deutschen Strafgesetzbuch. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 316 ff.

Brockhausen, Karl.

肩書が、大学教授とだけであるから、よく分らないが、論文の内容から、ウィーン大学の行政法の教授であるかも知れない。

Strafverfügung im Verwaltungsstrafverfahren. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 157 ff.

Delaquis, Ernst.

デラキーは、スイスの生まれであるが、ベルリン大学のリスト研究室に学び（同じ頃、ラートブルフ、コールラウシュ、ツー・ドーナ、そしてスイスのハフター、オーストリアのリットラーが在籍していた）一九〇七年、Rehabilitation im Strafrecht, 1907 により、教授資格を取得した。本誌に論文を発表した当時は、ベルリン大学私講師であつた。一九一四年、フランクフルト大学員外教授、一九一九年ベルン大学正教授、一九二九年ハンブルク大学教授を経て、一九三四年、再びベルン大学教授となつた。その後、立法に参画するため、

実務界に入り、ベルン大学の名誉教授となつた。一九五一年三月、死去。

Die Rehabilitation in den Strafgesetzvorentwürfen Österreichs, des Deutschen Reiches und der Schweiz. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 282 ff.

v. Doleschall, Alfred.

ブダペスト大学正教授の肩書をもつが、専攻が何であるかは不明である。

Das neue ungarische Pressgesetz. ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 134 ff.

Exner, Franz.

一九一一年頃まで、ウィーン大学私講師、一九一二年にツェルノヴィッツ大学員外教授、一九一九年にテュービンゲン大学教授となつたエックスナーは、その後、ミュンヘン大学に移り、一九四七年一〇月、同地で死亡した。

Das Prinzip der Schuldhaftung im österreichischen und deutschen Strafgesetzentwurf. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 405 ff.

Bemerkungen zur Theorie der Wissentlichkeit und des dolus eventualis. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 419 ff.

Was ist Kriminalpolitik? ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 275 ff.

Über Gerechtigkeit im Strafmass. ÖZStr. 8. Jg. 1918–20, S. 290 ff.

（一九一九年六月一二日に行なつたテュービンゲン大学教授就任講演であり、単行本としても公刊された。）

Graf Gleispach, W.

グライスパッハは、一九一四年にウィーンに移るまでは、プラーハ大学教授であつた。一九一四年にウィーン大学教授となつたが、ナチス党の政権奪取、オーストリー併合の後、ベルリンに移り、同大学教授として活躍し、ナチス刑法に左袒した。その後の消息は全く不明である。

Randbemerkungen zum Strafgesetzentwurf (Eine Erwiderung auf den Aufsatz von Makarewicz). ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 330 ff.

Der österreichische Strafgesetzentwurf und das Schuldproblem. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 209 ff.

Das Zusammentreffen von strafbaren Handlungen und Strafgesetzen. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 31 ff.

Krieg und Strafrechtsreform. ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 103 ff.

Die Tilgung der Verurteilung. ÖZStr. 7. Jg. 1916–18, S. 399 ff.

Die Regierungsvorlage über das Jugendstrafrecht. ÖZStr. 8. Jg. 1918–20, S. 1 ff.

Goldschmidt, James.

ユダヤ系なるが故にナチスに追われ、アルゼンチンで客死した、

ベルリン大学教授ジェームス・ゴールドシュミットが、刑法・訴訟法の一般理論に限りない寄与を残したということについては、ここに多言を要しないであろう。有名な緊急避難論が、本誌に発表され、後に単行本として公刊され、期待可能性論の形成に多大の寄与をしたことは、余りにも有名である。

Die Technik des Besonderen Teiles in dem österreichischen, deutschen und schweizerischen Vorentwurf und in dem deutschen Gegenentwurf. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 221 ff.

Der Notstand, ein Schuldproblem mit Rücksicht auf die Strafgesetzentwürfe Deutschlands, Österreichs und der Schweiz. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 129.

Einige Nachträge zu der Abhandlung „Der Notstand, ein Schuldproblem." ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 224 ff.

Gross, Hans.

グラーツの犯罪科学研究所を主宰し、犯罪捜査科学を体系化したグラーツ大学教授グロスの実体刑法に関する論文。

Notwehr und Notstand im österreichischen Strafgesetzentwurf. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 88 ff.

Haberda, Albin.

筆者は、ウイーン大学の法医学教授であろうか。

Gerichtsärztliche Bemerkungen über strafbare Handlungen gegen Leib und Leben im Vorentwurf zu einem österreichischen Strafgesetzbuche. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 463 ff.

Heimberger, Joseph.

ボン大学教授ハイムベルガーは、常盤敏太教授によれば、好人物のまとめ役的存在であつたとか（同・ラートブルッフ、五六頁）。

Die Grenze zwischen Frucht und Menschenleben. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 163 ff.

v. Hentig, Hans.

ハンティッヒが、ミュンヘンで気楽な勉強三昧の生活をしていた頃の論文である。

Die Verwahrung gefährlicher Elemente nach dem Entwurfe eines französischen Irrengesetzes. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 217 ff.

Die Kriminalität der Werwitweten und Geschiedenen. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 368 ff.

Hoegel, Hugo.

ホエーゲルは、ウイーンの検事総長であり、本誌の編集者の一人であつた。一九〇二年草案の起草に、ランマッシュやシュトースとともに活躍した。

Vierzig Jahre Strafverfahren. ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 1 ff.

Strafrechtsfolgen nach der Novelle vom 15. November 1867.

ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 113 ff.

v. Isopeseul-Grecul, Konst. Ritter.

ヴ・イソペゾイル・グレクールは、肩書が大学教授であるが、専攻等不明である。Das Wucherstrafrecht, 1906 という著書がある。

Die strafrechtlichen Nebengesetze und das Militärstrafrecht. ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 417 ff.

v. Jauregg, Wagner.

ウイーン大学の精神病学の正教授である。アンアフェンブルク月刊誌四巻に、オーストリア刑法の責任能力規定につき論じている。

Der Zurechnungsfähigkeitsparagraph im Strafgesetzentwurfe. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 17 ff.

Über Behandlung gemeingefährlicher Geisteskranken. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 70 ff.

Kadečka, Ferdinand.

カデツカとよぶ人もある、正しくは、カデチカである。後に、ウイーン大学教授になつたが、一九一一年には、ウイーンの検察官、その後、司法省参事官をしていた。

Das Milderungsrecht im österreichischen Vorentwurf. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 175 ff.

Der Begriff des Pressdelikts im deutschösterreichischen Pressdelikt. ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 311 ff.

Kahl, Wilhelm.

ベルリン大学教授（員外教授）の肩書をもつた司法省参事官。

Die falsche Aussage nach dem österreichischen Vorentwurf. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 307 ff.

Kitzinger, Friedrich.

ミュンヘン大学の法医学の教授である。

Die strafrechtliche Behandlung des Alkohlmissbrauches nach deutschem und österreichischem Vorentwurf. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 429 ff.

Klein, Franz.

当時、司法大臣をしていたが、オーストリアの法制度の近代化に重要な寄与をした。

Die Zeugenpflicht der an der Herausgabe einer Zeitung beteiligten Personen. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 390 ff.

v. Krzymuski, Edmund.

Über den Ausdruck „eine Handlung unternehmen" nach dem Sprachgebrauche des österreichischen Strafgesetzbuches. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 109 ff.

Langer, A.

検事長の肩書をもつた実務家であることの他は、不明である。アンアフェンフルク月刊誌二巻に、恩赦と仮釈放につき論じている。

Der Kettenhandel. ÖZStr. 7. Jg. 1916–18, S. 344 ff.

Übermässiger Preis oder übermässiger Gewinn? ÖZStr. 7. Jg. 1916–18, S. 439 ff.

Lederer, Max.

プラークの陪席判事 Auskultant という肩書で、全刑法雑誌二六巻に心理学的な事実の診断、二八巻に北米のプロベーション制度、三二巻に保安処分としての断種につき書いている。

Fortschritte auf dem Gebiete der Jugendfürsorge. Unter Berücksichtigung der Verhandlungen der Kinderschutzkongresse in Brüssel und Salzburg. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 264 ff.

Lelewer, Georg.

私講師の肩書をもつが、専攻は軍刑法であるから、ウイーンの士官学校の教官であろうか。

Die österreichisch-ungarische Militärstrafprozess-Entwürfe. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 121 ff.

Strafrechtliches aus dem neuen Wehrgesetze, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 342 ff.

Lenz, Adolf.

グラーツ大学教授レンツは、グロス教授のあと、グラーツ大学犯罪科学研究所を主宰していたことは有名である。

Die Aufgaben des Richters nach dem Vorentwurf zu einem österreichischen Strafgesetzbuche. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 110 ff.

Die Zurechnungsfähigkeit nach dem Vorentwurf zu einem österreichischen Strafgesetzbuche. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 46 ff.

Die Persönlichkeit des Verbrechers. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 399 ff.

Die sichernde Massnahme. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 283 ff.

Völkerrechtliche Vorfragen des Strafrechts in Kriegszeiten. ÖZStr. 7. Jg. 1916–18, S. 181 ff.

Das Strafverfahren und der Strafvollzug bei Jugendlichen. ÖZStr. 8. Jg. 1918–20, S. 25 ff.

v. Lenzbrugg, Arnold Madlé.

この著者については、殆んど何も知ることができない。

Die Stellung der politischen Behörde bei der Bekämpfung der Preistreiberei. ÖZStr. 7. Jg. 1916–18, S. 357 ff.

Liepmann, Moritz.

インスブルク大学教授で、教育刑の主張者として有名なリープマンについて、ここさらに説明する必要はあるまい。

Die Einschränkung des Wahrheitsbeweises bei Beleidigungsklagen. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 205 ff.

v. Liszt, Franz.

新派刑法学の主唱者リストの保安処分に関する小論である。

Die „sichernde Massnahmen" in den drei Vorentwürfen. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 3 ff.

Löffler, Alexander.

この雑誌の編集責任者として、殆んど全巻に健筆をふるつた。ウイーン大学の正教授である。

Die Reform des österreichischen Strafgesetzes.

I. Einleitung. Das ausserordentliche Milderungsrecht. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 140 ff.

II. Die Anwendung der Einzelhaft. S. 342 ff.

III. Strafe für politische Verbrecher, S. 353 ff.

Die Abgrenzung von Vorsatz und Fahrlässigkeit mit Berücksichtigung des deutschen und österreichischen Vorentwurfes. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 131 ff.

Vorschläge zum österreichischen Strafgesetzentwurfe. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 401 ff.

Das Rechtsmittel wegen Anrechnung der Untersuchungshaft. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 413 ff.

Vorschläge zum österreichischen Strafgesetzentwurfe. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 45 ff.

Das Rechtsmittel wegen Anrechnung der Untersuchungshaft. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S.77 ff.

Die Arbeiten der Kommission des Herrenhauses für Justizgegenstände über die Gesetzesvorlagen zur Reform des Strafrechts. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 117 ff.

Die Anrechnung der Untersuchung. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 230 ff.

Die Beratungen des österreichischen Herrenhauses über die Gesetzesvorlagen zur Reform des Strafrechts. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 232 ff.

Der Entwurf eines Gesetzes betreffend die Auswandlung. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 247 ff.

Das advokatorische Immunitätsrecht in Österreich. Eine erweiterte Buchbesprechung. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 388 ff.

Die Beziehung des Vorsatzes zum Schadensbetrage bei Vermögensdelikten. ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 1 ff.

Zwei bittere Lehren. ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 101 ff.

Das neue österreichische Wucherrecht. ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 290 ff.

Die Verleitung zum Missbrauch der Amtsgewalt. ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 411 ff.

Veruntreuung an eigenen Sachen nach österreichischen Rechte? ÖZStr. 7. Jg. 1916–18, S. 429 ff.

Makarewicz, Jurius.

全刑法雑誌一七巻（一八九七年）に、クラカウ大学私講師として、刑法学における古典主義と実証主義、二五巻に同大学教授として、オーストリア刑法二一四条の沿革と刑事政策的意義、二六巻に正法論を書いている。

オーストリア刑法雑誌に執筆した当時は、レンベルク大学教授である。その後のことは、不明である。

Randbemerkungen zum Strafgesetzentwurf ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 244 ff.

Menzel.

教授の肩書のほか、何も分らない。アンアフェンブルク月刊誌一九巻に、マグデブルクの警察長官の肩書で淫行媒合罪を論じている同名の者がいるが、いかなる関係にあろうか。本誌に論文を執筆した頃、或いは、ウイーン大学で法史学でも講じていた人であろうか。

Protagoras als Kriminalist, ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 389 ff.

Miřička, August.

プラーハ大学教授ミジチカ（我が国では、一般に、ミリッカとよんでいるが、正確ではない）には、私講師論文として、Die Formen der Strafschuld und ihre gesetzliche Regelung, 1903 がある。

Erfolgshaftung und Gefährdung im österreichischen Strafgesetzentwurf, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 336 ff.

Zur Frage des zeitlichen Geltungsgebietes des neuen Kriegsstrafrechts, ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 324 ff.

Die Rekonstruktion der Urteile in Strafsachen, ÖZStr. 7. Jg. 1916–18, S. 318 ff.

Die Verbesserung des Schutzes der Ehre. ÖZStr. 8. Jg. 1818–20, S. 89 ff.

Mittermaier, Wolfgang.

後に、ハイデルベルク大学に移り、そこで一生を終えたミッテルマイヤーが、ギーセン大学時代に書いた小論である。

Die strafbaren Handlungen gegen die Sittlichkeit im Vorentwurf zu einem österreichischen Strafgesetzbuch von 1909. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 250 ff.

Ofner, Julius.

著者オフナーについても、知るところはない。

Das soziale Charakterminimum. (Nicht die Tat, sondern der Täter ist zu bestrafen.) ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 93 ff.

v. Overbeck, Alfred Freiherr.

スイスのフライブルク大学教授である。

Zur Begriffsbestimmung des Vorsatzes im österreichischen Strafgesetzentwurfe. ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 297 ff.

Perten, Paul.

この筆者についても、殆んど何も知られていない。

Die Teilnahme am Verbrechen in dem österreichischen Strafgesetzvorentwurfe von 1909. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 435 ff.

Pincherle, Emilio.

トリエステで弁護士を開業していたということの他、知られていない。

Die Abstimmung der Geschworenen nach der neuen italienischen Strafprozessordnung. ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 27 ff.

Rittler, Theodor.

一九六七年三月、インスブルックにおいて、九一歳の生涯を終えたリットラーは、オーストリアを代表する刑法学者であつた。

Die Regierungsvorlage zur Reform des Strafrechtes. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 326 ff.

Der Grundsatz der Schuldhaftung und objektiven Bedingungen der Strafbarkeit nach deutschem und österreichischem Rechte untersucht. ÖZStr. 8. Jg. 1618-1920, S. 323 ff.

Rosenfeld, Ernst H.

ミュンスター大学の教授として、その一生を終えたローゼンフェルトの少壮教授時代の論説である。

Strafensystem und Strafzumessung im Österreichischen und im deutschen Vorentwurf. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 309 ff.

Die Stellung des Beschuldigten im neuen italienischen Strafverfahren. ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 104 ff.

Přibram, Karl.

筆者プジブラムについては、殆んど何も分らない。

Preisbildung und Recht. ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 199 ff.

Seifert.

著者は、クロアチアの検察官である。

Der Strafvollzug nach dem österreichischen Vorentwurf einer Strafprozessordnung. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 64 ff.

Stöhr.

この著者についても、殆んど何も分つていない。

Über die Behandlung der Zurechnungsfähigkeit im österreichischen Vorentwurfe. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 34 ff.

Stooss, Karl.

スイス刑法予備草案の起草者として有名な著者のウィーン大学教授時代の論稿である。

Die sichernde Massnahmen gegen Gemeingefährliche im österreichischen Strafgesetzentwurf. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 25 ff.

Zur Natur der Fahrlässigkeit ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 5 ff.

Die Geldstrafe im österreichischen Strafgesetzentwurfe. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 12 ff.

Verminderte Zurechnungsfähigkeit und sichernde Massnahmen. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 306 ff.

Unmündige und Vollberauschte. Kritische Erörterungen. ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 57 ff.

Was bedeuten die Worte: eine Handlung unternehmen im Sinne von 8 StGB ? ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 94 ff.

Storch.

シュトルヒは、プラーク（ボヘミア）大学刑法教授である。

Die Bestrafung des Versuches in dem österreichischen Vorentwurfe. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 1 ff.

Die Bemessung der Strafe in den österreichischen Strafgesetzentwürfen. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 1 ff.

Über die Straflosigkeit der parlamentarischen Berichterstattung. ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 1 ff.

筆者は、ウィーン宮廷顧問官であり、弁護士の肩書きをもつている。

Die Rechtswirksamkeit der militärgerichtlichen Ehrenstrafen in Ungarn. ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 269 ff.

Das Geltungsgebiet des materiellen Strafrechts. ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 462 ff.

v. Szöllösy.

筆者はオーストリア・ハンガリーの陸軍法務官である。

Das polizeiliche Strafverfahren in Ungarn. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 168 ff.

Tesar, Otokar.

ウィーン大学講師で、憲法裁判所の調査官をかねていた。

Die Rechtsverwirklichung im Strafrecht. ÖZStr. 8. Jg. 1819-20, S. 368 ff.

Tezner.

この筆者については、殆んど明らかでない。

Zur Frage des Erwerbes der nicht fideikommissarischen erblichen Herrenhauswürde. ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 98 ff.

二　事項別目録

祝辞・追悼文

祝辞や追悼文の受け手をアルファベット順で列挙する。それの執筆者は（　）で表示する。

C. L. v. Bar † (Löffler) ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 246.

Karl Binding (Löffler) ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 389.

Karl Binding † (Löffler) ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 423 ff.

Karl v. Birkmeyer † (Löffler) ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 419 ff.

Hans Gross (Gleispach) ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 299 f.

Georg Jellinek (Löffler) ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 1 f.

Josef Kohler (Löffler) ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 417 f.

H. Kriegsmann † ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 267.

Heinrich Lammasch † (Gleispach) ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 415 f.

Ferdinand Leutner † (Löffler) ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, 8. 421 f.

Franz v. Liszt (Löffler) ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 129.

Franz v. Liszt † (Löffler) ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 411 ff.

R. Lönig † (Löffler) ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 246.

A. Marcovich † ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 268.

Heinrich Reicher † (Löffler) ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 3 f.

Josef Rosenblatt (Löffler) ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 295 f.

Alfred Schober † (Rittler) ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 293.

Zur siebzigsten Wiederkehr des Geburtstags von Karl Stooss (Gleispach) ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 287 f.

v. Szöllösy † (Maschka) ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 101 f.

E. R. v. Ulmann † (Löffler) ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 107.

Josef Unger † (Löffler) ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 105 f.

Wach (Löffler) ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 245.

刑法史等一般的問題については以下の論文がこれを扱っている。

Menzel, Protagoras als Kriminalist. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 389 ff.

Ofner, Das soziale Charakterminimum. (Nicht die Tat, sondern der Täter ist zu bestrafen) ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 93 ff.

Löffler, Zwei bittere Lehren. ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 101 ff.（オーストリア皇太子の暗殺に関連して書かれたものである）

オーストリアの刑法改正及び政府草案に関する論文。

Makarewicz, Randbemerkungen zum Strafgesetzentwurf. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 244 ff.

Gleispach, Randbemerkungen zum Strafgesetzentwurf. (Eine Erwiderung auf den Aufsatz von Makarewicz) ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 330 ff.

Löffler, Die Reform des österreichischen Strafgesetzes.

I. Einleitung. Das ausserordentliche Milderungsrecht, ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 140 ff.

II. Die Anwendung der Einzelhaft, ebenda. S. 342 ff.

III. Strafe für politische Verbrecher, ebenda. S. 353 ff.

Ders., Vorschläge zum österreichischen Strafgesetzentwurfe. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 401 ff. u. 4. Jg. 1913, S. 45 ff.

Ders., Die Arbeiten der Kommission des Herrenhauses für Justizgegenstände über die Gesetzesvorlagen zur Reform des Strafrechts. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 117 ff.

Ders., Die Beratungen des österreichischen Herrenhauses über die Gesetzesvorlagen zur Reform des Strafrechts. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 232 ff.

Rittler, Die Regierungsvorlage zur Reform des Strafrechts. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 326 ff.

特別刑法（軍事刑法、軍刑法、経済刑法、その他、新聞紙等に関する軍行法を含む）に関する論文。

Auer, Ungarisches Kriegsstrafrecht, ÖZStr. 6. Jg. 1915, S.17 ff.

Gleispach, Krieg und Strafrechtsreform, ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 103 ff.

v. Isopeseul-Grecul, Die strafrechtlichen Nebengesetze und das Militärstrafrecht, ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 417 ff.

Lelewer, Die österreich-ungarische Militärstrafprozess-Entwürfe, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 121 ff.

Ders., Strafrechtliches aus dem neuen Wehrgesetze, ÖZStr, 3. Jg. 1912, S. 342 ff.

Lenz, Völkerrechtliche Vorfragen des Strafrechts in Kriegszeiten, ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 181 ff.

Szilágyi, Die Rechtswirksamkeit der militärgerichtlichen Ehrenstrafen in Ungarn, ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 269 ff.

Langer, Übermässiger Preis oder übermässiger Gewinn? ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 439 ff.

v. Lenzbrugg, Die Stellung der politischen Behörde bei der Bekämpfung der Preistreiberei, ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 357 ff.

Löffler, Das neue österreichische Wucherrecht, ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 290 ff.

Přibram, Preisbildung und Recht, ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 199 ff.

Diskussion über Preisbildung und Recht in der Wiener Juristischen Gesellschaft, ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 217 ff.

v. Doleschall, Das neue ungarische Pressgesetz, ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 134 ff.

Kadečka, Der Begriff des Pressdelikts im deutschösterreichischen Pressdelikt, ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 311 ff.

Brockhausen, Strafverfügung im Verwaltungsstrafverfahren, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 157 ff.

少年刑法に関する論文。

Lederer, Fortschritte auf dem Gebiete der Jugendfürsorge. Unter Berücksichtigung der Verhandlungen der Kinderschutzkongresse in Brüssel und Salzburg, ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 264 ff.

Gleispach, Die Regierungsvorlage über das Jugendstrafrecht, ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 1 ff.

Lenz, Das Strafverfahren und der Strafvollzug bei Jugendlichen, ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 25 ff.

Diskussion über das Jugendstrafrecht in der Wiener Juristischen Gesellschaft, ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 57 ff.

犯罪学・刑事政策関係の論文は、次の通りである。

Aschaffenburg, Experimentelle Psychologie und Strafrechtspflege, ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 71 ff.

Löffler, Nachwort zu diesem Aufsatz (Aufsatz von Aschaffenburg), ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 87 ff.

Exner, Was ist Kriminalpolitik? ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 275 ff.

v. Hentig, Die Kriminalität der Verwitweten undGeschiedenen. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 368 ff.

Lenz, Die Persönlichkeit des Verbrechers, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 399 ff.

刑法総則をテーマとする論稿を、通常の刑法総論の体系に従って整理すると次の通りである。

〈適用領域〉

Miřička, Zur Frage des zeitlichen Geltungsgebiets des neuen Kriegsstrafrechts, ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 324 ff.

Szilagyi, Das Geltungsgebiet des materiellen Strafrechts, ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 462 ff.

〈用語例〉

v. Krzymuski, Über den Ausdruck eine Handlung unternehmen nach dem Sprachgebrauche des österreichischen Strafgesetzbuches, ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 109 ff.

Stooss, Was bedeuten die Worte: eine Handlung unternehmen im Sinne von 8 StGB? ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 94 ff.

〈正当防衛・緊急避難〉

Kadečka, Das Milderungsrecht im österreichischen Vorentwurf, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 175 ff.

Goldschmidt, Der Notstand, ein Schuldproblem. Mit Rücksicht auf die Strafgesetzentwürfe Deutschlands, Österreichs und der Schweiz, ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 129 ff.

Goldschmidt, Einige Nachträge zu der Abhandlung „Der Notstand, ein Schuldproblem," ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 224 ff.

Gross, Notwehr und Notstand im österreichischen Strafgesetzentwurf, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 88 ff.

責任論一般

Exner, Das Prinzip der Schuldhaftung im österreichischen und deutschen Strafgesetzentwurf, ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 405 ff.

Rittler, Der Grundsatz der Schuldhaftung und die objektiven

Bedingungen der Strafbarkeit nach deutschem und österreichischem Rechte untersucht, ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 323 ff.

Exner, Bemerkungen zur Theorie der Wissentlichkeit und des dolus eventualis, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 419 ff.

Gleispach, Der österreichische Strafgesetzentwurf und das Schuldproblem, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 209 ff.

Miřička, Erfolgshaftung und Gefährdung im österreichischen Strafgesetzentwurf, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 333 ff.

責任—故意・過失

Löffler, Die Abgrenzung von Vorsatz und Fahrlässigkeit mit Berücksichtigung des deutschen und österreichischen Vorentwurfe, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 131 ff.

v. Overbeck, Zur Begriffsbestimmung des Vorsatzes im österreichischen Strafgesetzentwurfe, ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 297 ff.

Stooss, Zur Natur der Fahrlässigkeit, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 5 ff.

責任能力

v. Jauregg, Der Zurechnungsfähigkeitsparagraph im Strafgesetzentwurfe, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 17 ff.

Ders., Über Behandlung gemeingefährlicher Geisteskranker, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 70 ff.

Lenz, Die Zurechnungsfähigkeit nach dem Vorentwurf zu einem österreichischen Strafgesetzbuche, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 46 ff.

Stöhr, Über die Behandlung der Zurechnungsfähigkeit im österreichischen Vorentwurfe, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 34 ff.

Stooss, Verminderte Zurechnungsfähigkeit und sichernde Massnahme, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 306 ff.

Ders., Unmündige und Vollberauschte. Kritische Erörterungen, ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 57 ff.

Kitzinger, Die strafrechtliche Behandlung des Alkohlmissbrauches nach deutschem und österreichischem Vorentwurf, ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 429 ff.

Diskussion über die Frage der Zurechnungsfähigkeit, abgehalten in der Österreichischen Kriminalistischen Vereinigung am 7. und 10. November 1910, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 59 ff.

未遂・共犯

Storch, Die Bestrafung des Versuches in dem österreichischen Vorentwurfe, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 1 ff.

Perten, Die Teilnahme am Verbrechen in dem österreichischen und dem deutschen Strafgesetzvorentwurfe von 1909, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 435 ff.

議員の免責

Löffler, Das advokatorische Immunitätsrechte in Österreich. Eine

erweiterte Buchbesprechung, ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 388 ff.

Storch, Über die Straflosigkeit der parlamentarischen Berichterstattung, ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 1 ff.

刑罰・処分（量刑その他の総論の問題）

Stooss, Die Geldstrafe im österreichischen Strafgesetzentwurfe, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 12 ff.

v. Hentig, Verwahrung gefährlicher Elemente nach dem Entwurfe eines französischen Irrengesetzes, ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 217 ff.

Lenz, Die sichernde Massnahme, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 283 ff.

v. Liszt, Die „sichernde Massnahme" in den drei Vorentwürfen, ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 3 ff.

Stooss, Die sichernde Massnahmen gegen Gemeingefährliche im österreichischen Strafgesetzentwurf, ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 25 ff.

Delaquis, Die Rehabilitation in den Strafgesetzvorentwürfen Österreichs, des Deutschen Reiches und der Schweiz, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 282 ff.

Gleispach, Das Zusammentreffen von strafbaren Handlungen und Strafgesetzen, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 31 ff.

Tesar, Die Rechtsverwirklichung im Strafrecht, ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 368 ff.

v. Birkmeyer, Gesetz und richterliches Ermessen in den Vorentwürfen zu einem österreichischen und einem deutschen Strafgesetzbuch, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 316 ff.

Exner, Über Gerechtigkeit im Strafmass, ÖZStr. 8. Jg. 1918, 1918-20, S. 290 ff.

Lenz, Die Aufgaben des Richters nach dem Vorentwurf zu einem österreichischen Strafgesetzbuche, ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 110 ff.

Storch, Die Bemessung der Strafe in den österreichischen Strafgesetzentwürfen, ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 1 ff.

Hoegel, Strafrechtsfolgen nach der Novelle vom 15. November 1867, ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 113 ff.

Rosenfeld, Strafensystem und Strafzumessung im österreichischen und im deutschen Vorentwurf, ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 309 ff.

行刑

Bámbéry, Die Fachbildung der Gefängnisbeamten, ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 505 ff.

Seifert, Der Strafvollzug nach dem österreichischen Vorentwurf einer Strafprozessordnung, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 64 ff.

刑法各法の関係としては、次のような論文がある。

Goldschmidt, Die Technik des Besonderen Teils in dem österreichischen, deutschen und schweizerischen Vorentwurf und in dem deutschen Gegenentwurf, ÖZStr. 3. Jg. 1912, 221 ff.

Haberda, Gerichtsärztliche Bemerkungen über strafbare Handlun-

gen gegen Leib und Leben im Vorentwurf zu einem österreichischen Strafgesetzbuche, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 463 ff.

Heimberger, Die Grenze zwischen Frucht und Menschenleben, ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 163 ff.

Kahl, Die falsche Aussage nach dem österreichischen Vorentwurfe, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 307 ff.

Langer, Der Kettenhandel, ÖZStr. 7. Jg. 1916–18, S. 344 ff.

Löffler, Der Entwurf eines Gesetzes betreffend die Auswandlung, ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 247 ff.

Ders., Die Beziehung des Vorsatzes zum Schadensbetrage bei Vermögensdelikten, ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 1 ff.

Ders., Die Verleitung zum Missbrauch der Amtsgewalt, ÖZStr. 7. Jg. 1916–18, S. 411 ff.

Ders., Veruntreuung an eigenen Sachen nach österreichischen Rechte? ÖZStr. 7. Jg. 1916–18, S. 429 ff.

Miřička, Die Verbesserung des Schutzes der Ehre, ÖZStr. 8. Jg. 1918–20, S. 89 ff.

Mittermaier, Die strafbaren Handlungen gegen die Sittlichkeit im Vorentwurf zu einem österreichischen Strafgesetzbuch von 1909, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 250 ff.

刑訴類

Tezner, Zur Frage des Erwerbes der nicht fideikommissarischen erblichen Herrenhauswürde, ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 98 ff.

Bámbéry, Die Schwurgerichtsreform in Ungarn, ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 357 ff.

Gleispach, Die Tilgung der Verurteilung, ÖZStr. 7. Jg. 1916–18, S. 399 ff.

Hoegel, Vierzig Jahre Strafverfahren, ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 1 ff.

Klein, Die Zeugnispflicht der an der Herausgabe einer Zeitung beteiligten Personen, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 390 ff.

Liepmann, Die Einschränkung des Wahrheitsbeweises bei Beleidigungsklagen, ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 205 ff.

Löffler, Das Rechtsmittel wegen Anrechnung der Untersuchungshaft, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 413 ff.

Löffler, wie oben, 4. Jg. 1913, S. 77 ff.

Löffler, Die Anrechnung der Untersuchung, ÖZStr. 4. Jg. 1913, 230 ff.

Miřička, Die Rekonstruktion der Urteile in Strafsachen, ÖZStr. 7. Jg. 1916–18, S. 318 ff.

Pincherle, Die Abstimmung der Geschworenen nach der neuen italienischen Strafprozessordnung, ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 27 ff.

Rosenfeld, Die Stellung des Beschuldigten im neuen italienischen Strafverfahren, ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 104 ff.

v. Szöllösy, Das polizeiliche Strafverfahren in Ungarn, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 168 ff.